

撮る人

“toruhito”

吉本和樹個展

Yoshimoto Kazuki solo exhibition

二〇一五年 十二月二四日「火」十二月六日「日」十一時～十九時

月曜日休廊一金曜日二〇時まで一最終日十八時まで ギャラリー・パルク

二〇〇五年に日本写真映像専門学校を卒業、二〇〇七年に京都造形芸術大学情報デザイン学科を卒業、二〇一二年に情報科学芸術大学院大学(AKAS)を修了した吉本和樹(よしもとかずき/一九八四年・広島県生まれ)は、写真をおもな表現媒体として、これまでに広島をモチーフに撮影をおこないながら、ヒロシマという場所に対して人々が抱くイメージや、その場所が持つ機能や力、そこに向けられるまなざしをテーマに制作活動を行っています。

吉本の初個展となる本展は、二〇一一年より取り組んでいる、原爆ドームに対してカメラを向ける人々の後ろ姿だけを撮影したシリーズ《撮る人 A-bomb Dome》により構成します。

一九四五年に原子爆弾が投下された際、爆心地に残った産業奨励館という建築は、その残ったドーム状の鉄枠から「原爆ドーム」と呼ばれるものとなりました。その後、建築家・丹下健三の設計により一九五五年に設置された広島平和記念公園はこの原爆ドームを北の起点として、南に向かって原爆死没者慰霊碑、広島平和記念資料館が一直線に配されたもので、原爆ドームはいわばヒロシマのシンボルとして位置づけられたといえます。そして現在、広島市のみで年間におよそ一六五万人、海外からだけでもおよそ六五万人以上の旅行者がこの地を訪れ、そのほとんどがドームを目にし、そして、おそらくその大多数の人々がドームにカメラを向けているでしょう。

広島に生まれた吉本にとって「路面電車を降り、横断歩道を渡り、原爆ドームにたどり着く。そして写真を撮る。撮影する場所も、みんなだいたい同じ場所で撮影する」というこの光景は、とても見慣れたものだったといえます。しかし、ある時に「この一連の流れがオートメーション化されたもののように見えたと」いう吉本は、その毎日延々と繰り返される画一的な動きにどこか違和感を覚え、ある日、「原爆ドームと、それを撮る人」をひとつに納めた写真を何気なく撮影したといえます。しかし、撮影した写真を見返すうちに、次第にそこに写る「撮る人」の性別、国籍、年齢、体格、服装、服の皺、肌の色、髪の色、持ち物、カメラやその構え方などが当たり前に「違っ」とに改めて気付く、そこに純粋な興味を抱くようになったとい、後日に「原爆ドームを撮影している人の背後に気づかれないようにそっと近づき、後ろ姿のみを撮影してみた。」と言います。

『「原爆ドーム」を撮る人』への興味に端を発した吉本の視点は、「原爆ドームを『撮る人』へと移り、《撮る人 A-bomb Dome》のシリーズ制作は始まりました。

吉本は、ここには言葉で形容しがたい独特な雰囲気があり、それは広島という街の隅々まで充満し、あるいはそれらについて考えた時にさえも、そつした雰囲気を感じる、と言います。そして、その中心にはシンボルとして配置された原爆ドームがあると考えています。

今日までのおよそ七〇年に渡り、広島は「ヒロシマ」、産業奨励館は「原爆ドーム」と呼ばれ、その強い引力によって人々を引きつけ、訪れる様々な人々と歴史的な「コンテキスト」を共有するための普遍的なシンボルとして、今も強力に機能しているといえます。

しかし、その引力があまりに強力すぎるが故に、ヒロシマやドームは私たちの目と思考を瞬時に引きつけ、「目の前のものをよく見る、目の前のものから思考する」という態度を瞬間的・永続的に停滞させてしまう要素をも併せ持つのかも知れません。

本シリーズの制作を通じて吉本は、原爆ドームの周辺にあるモノや人を含め、そのままに観察することから、これを覆う「雰囲気」に目を凝らし、その考察を試みています。また、それは目の前の光景を物語から解放し、鑑賞者をまず「見る人」に立脚させるものであるともいえます。

撮る人と私

私は原爆ドームにむけてシャッターをきる人々の姿に対して、最初は特に気にもとめていなかった。それは見慣れた光景だった。様々なモニメントが点在する平和公園のなかでも原爆ドームは最も有名であり、爆発によって破壊された姿は初めてそこを訪れた人にとつて、思わずシャッターをきりたくなるほどのインパクトがあると思う。

しかし、多くの人々が鞆からカメラや携帯電話を取り出し撮影するその様子を、少し距離をおいて一定時間眺めていると、少しずつ異なる光景に思えてきた。

路面電車を降り、横断歩道を渡り、原爆ドームにたどり着く、そして写真を撮る。

撮影する場所も、みんなだいたい同じ場所で撮影する。

この一連の流れがオートメーション化されたもののように見え、私はその様子を何枚か撮影した。当初はその一連の流れのほうに興味を持ち、原爆ドームもファインダーの中に入れ、「原爆ドームをとっている人」の情景として捉えていたが、撮影した写真を見直しているうちに、撮影している人の姿(性別、国籍、年齢、体格、服装、服の皺、髪の色、持ち物、カメラの構え方、など)のほうがやたら気になり始めた。

そこで後日、原爆ドームを撮影している人の背後に気づかれないようにそっと近づき、後ろ姿のみを撮影してみた。

「これだ」と思った。

吉本和樹

一九八四年、広島県生まれ。二〇〇五年、日本写真映像専門学校卒業。

二〇〇七年、京都造形芸術大学情報デザイン学科卒業。二〇一二年、情報科学芸術大学院大学(AKAS)修了。

写真を表現媒体とし、主に広島(ヒロシマ)をモチーフに撮影をおこなう。

広島(ヒロシマ)という場所に対して人々が抱くイメージや、その場所が持つ機能や力、そこに向けられるまなざしをテーマに制作活動を行っている。

二〇一五年に京都造形芸術大学ギャルリオーブにてグループ展「視点の先 視点の場所」を開催。本展が初個展となる。

展示作品

一階入りロウインドウ部分

《ソテツ》

階段部分

《無題》

会場内

《撮る人 A-bomb Dome》